● 社会・生活教育 ●

主体的に「問い」を追究する児童の育成
～教材との出合いを工夫した授業づくりを通して～

東京都　**中央区立日本橋小学校**（校長 児玉大祐）

①導入の工夫
児童が自然と「調べたい！」と思う授業作りを目指す。
②地域教材の開発
児童が生活の基盤である地域に目を向け、自らの生活実態と学習内容を関連付けられるようにする。
③地域人材の活用
児童が社会的事象を切実感をもって捉えられるようにする。

Ⅰ　はじめに

中央区は、東京都23区の中央に位置し、銀座や日本橋などを有する長い歴史をもつ地域である。また、築地、人形町、佃・月島など、風情ある街並みを楽しめる街としても知られている。

本校は、東華小学校（明治34年創立）と十思小学校（明治10年創立）が統合し、平成２年に開校した。統合初年度の児童数は157名であったが、令和３年度には、392名までに増加した。

本校は、かつて西郷隆盛の屋敷があった場所とされている。近隣には明治座や甘酒横丁、水天宮などがある。約300年の歴史があるべったら市は、大提灯や、1500を超す数の提灯が飾られ、毎年多くの人が集まる。このように、歴史のある地域に支えられている学校である。

Ⅱ　研究の概要

１　主題設定の理由

令和２年度の研究では、「全ての児童が参加できる授業」を行う力を付けるために「ユニバーサルデザインを生かした授業」について学び、国語科を中心に授業改善を目指した。しかし、「児童が主体的に学ぶのが難しかった」、「単元そのものへの意欲や学ぶ目的意識がもてる授業づくりが必要である」などの課題があった。

そこで、今年度は、研究主題「主体的に『問い』を追究する児童の育成～教材との出合いを工夫した授業づくりを通して～」とし、社会科と生活科を中心に「導入の工夫」と「地域教材の開発」の二つの柱を大切にし

た研究を進めた。

社会科や生活科は、「問題解決的な学習」を基盤にしている教科の一つである。

社会は常に変化しており、今、授業で教えている知識は、将来、使い物にならなくなるかもしれない。そのため、最終的な答えを暗記することを学習の目的とせず、社会科や生活科では「見方・考え方」を働かせ、将来、出合うかもしれない新たな課題に対して、主体的に解決できる力を育成することを目的にした。

２　研究の内容と方法

(1) 内容

①導入の工夫

「教科書○ページを開きましょう。」から始まる Let's 型の授業ではなく、児童が自然と「調べたい！」と思う How Why What 型の授業作りを行った。研究授業を行うにあたり、「児童の日常とは掛け離れた事象や、児童が普段意識せずに関わっていることなどと、どう出合わせるか。どのようにして、興味、関心をもたせて引き付けさせるか。」という点について、様々な工夫をした。

②地域教材の開発

児童が生活の基盤である地域に目を向け、自らの生活実態と学習内容を関連付けることを意識して行った。実物と対面したり、観察・調査をしたりして、社会的事象を切実感をもって捉えることによって、児童が主体的に授業に臨むことを目標とした。

導入の工夫　**地域教材の開発**

(2) 方法

①授業研究

指導案を立てて模擬授業を行い、教員皆で導入を工夫した授業を受ける体験をしたり、改善方法を話し合ったりした。それを生かして、研究授業を行った。

②１人１実践

研究授業を行わなかった教員も、導入を工夫した授業を公開した。

③外部講師による指導

講師（國學院大學教授　安野功先生）から「社会科の授業づくり」について御講話いただくと共に、研究推進委員でもととなる指導案の型を考えた。

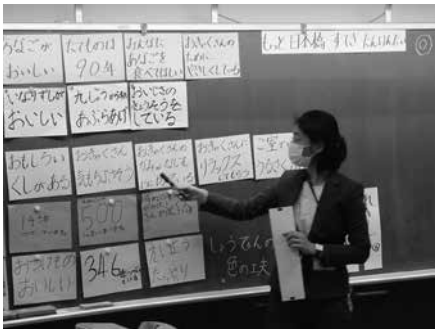
講師（文部科学省教科調査官　小倉勝登先生）から「社会科授業における教材研究・教材開発のポイント」について御講話いただいた。

④地域人材の活用

講師（保存会会長・株式会社江戸屋 代表取締役 濱田 捷利様）から日本橋地域の魅力について御講話いただいた。

⑤地域教材の開発

各学年が夏休み中に行った地域教材開発について報告会を行った。



Ⅲ　実践の内容

１学年の実践

自分事になるように身近な公園を教材に選び、資料提示によって気付きを広げる授業

(1) 目指す児童像（○）手立て（・）

①興味関心をもつ
○授業時間以外にも話題に出る。
○学習に身を乗り出してくる。
○進んで調べてくる。
・児童にとって魅力が多い場所を扱う。
・児童の生活経験や思いなどを探るため、児童と深く関わる。

②自分事になる
○こだわりをもつ。○没頭する。
○自分なりの工夫をする。
・児童が意見を交わしながら教師と共に単元を作っていく。

③関わる世界が広がる
○気付きを広げる、深める。
○新たな「問い」が生まれる。
・地域の人と関わる場を設定する。
・児童の気付きや問いを学級全体で共有化したり明確化したりする。

(2) 授業実践

生活科「こうえんへいこう」

地域の公共施設の一つである公園での活動を楽しむことや、地域の人と関わることを通して、街にある公共物や地域のよさに気付いたり、親しみや愛着をもったりすることをねらいとした。

・授業の様子

発問①「ここに貼ってあるものは、誰が使っているものですか。」
資料①子供カードと大人カードを貼った思考ツール（公園マップをもとに、児童と作成）

資料②ポイ捨て禁止看板のアップとルーズ写真（アップを見せた後に、ルーズで全体を見せる）
児童の反応「捨ててしまう人がいるから。」「捨ててほしくないから。」

(3) 成果（○）と課題（△）

○自分たちで公園に行く計画を立て、写真入りの公園マップにまとめ、共有したため、自分事となった。

△児童の主体的な活動を促すためには、教師の出番よりも、児童の出番が多くなるような支援を行う必要がある。

２学年の実践

お店見学で見付けた、「お店のすてきキーワードカード」の分類を通して、日本橋の町の「すてき」に気付く授業

(1) 目指す児童像（○…１年生と同様）手立て（・）

①興味関心をもつ。
・学習の場として、学区域という身近な場を選ぶことで、生活の中から情報を取り出したり、自分で調べたりできるようにする。
・学区域を中心に大まかに書かれた大きな地図(すてきマップ)を活用する。

②自分事になる。
・自分たちで町探検の計画を立て実行する。

③関わる世界が広がる
・各チームのお店見学発表の際に、キーワードカードを使うことで、ポイントを明確にしたり、分類して名前を付けることで日本橋の魅力について気付きを広げたり深めたりしやすくする。

(2) 授業実践

生活科「日本橋すてきたんけんたい」

日本橋の町は、町の人たちがとても協力的な町である。今回御協力いただいた「日本橋めぐりの会』の方から、日本橋の特徴あるお店や会社を 30 軒御紹介いただいた。児童はお店見学を通して、日本橋を守り育てる老舗の人や新しく日本橋の仲間に入り町を盛り立てようとしている人々と出会った。

・授業の様子

「お店のすてきキーワード」をグルーピングしたものに名前を付け、共有する。
児童の反応「おいしいと味は、似ている。」「優しいと思いやりがあるのも似ている。」

(3) 成果（○）と課題（△）

○ 30 軒のお店の「すてき」に触れることで、古きも新しきもみんなで力を合わせてすてきな町を作っていこうとする気持ちを児童が感じることができた。

△構造化を求めたり、人だけにフォーカスしてまとめたりしてしまわず、お店の「すてき」は人も場所も物も色々あるというところを落としどころにすると、児童中心の学習にすることができたのではないか。

３学年の実践

インタビューや見学を通して、区の産業の特色の一つである「問屋」で働く人たちの仕事の工夫と心意気を学ぶ授業

(1) 目指す児童像と手立て（・）

①自分から調べる。
・１学期からインタビューを中心に、タブレットや地図帳を活用して、少しずつ児童自身が考える時間を設ける。

②生活経験や既習事項を生かして「問い」に対する自分なりの予想を書く。
・導入部の資料提示を工夫する。

③関連した別の事象について調べようとする。（例　他の地域　他の年代など）
・別の事象の資料を加工して提示する。

④学んだことを日常生活に生かそうとする。
・振り返りの際に、さらに調べてみたいことを書くだけでなく、実際に図書を使って調べたり、保護者に聞いたりするようにする。

(2) 授業実践

社会科　単元名　「町の人々の仕事」
小単元名　「わたしたちのくらしとお店の仕事」

本小単元は、内容（2）「地域に見られる生産や販売の仕事」に関する内容で構成した単元である。江戸時代から続く横山問屋街を取り上げ､販売の仕事について調べる。そして、働いている人たちの「目利き」が横山・馬喰町問屋街を東京一の現金問屋街にしたことに気が付き、地域への誇りをもてるようにした。

・授業の様子

仕事の苦労ややりがいは何でしょう。問屋とはどのようにつながっているのでしょう。

洋服屋を営んでいる本校の保護者から、インタビュー形式で話を聞いた。
児童の反応「一つで売るのと、束で売るのと売り方が違う。」「なぜ、問屋は小売りしないのか。」

(3) 成果（○）と課題（△）

○ゲストティーチャーとの直接の触れ合いによって児童が地域の方の思いや願いに触れ、意欲的に学習に取り組むことができた。

△問屋の人が、長年の経験から、いつ、どのくらい、何を購入すれば売れるのを予想し、熟練の技を生かした目利きに焦点を当てると良い教材開発ができると良い。

４学年の実践

児童の芝居＆劇的なゲストティーチャーの登場　話し合ったことを最後に保存会会長に評価してもらう授業

(1) 目指す児童像と手立て（・）

①自分から調べる。
・児童が疑問に思ったり驚いたりするような資料を提示する。
・予想を必ず書く。

②生活経験や既習事項を生かして「問い」に対する自分なりの予想を書く。
・生活経験や既習事項を思い出すような体験活動、寸劇、クイズなどを行う。

③関連した別の事象について調べようとする。
・別の事象の資料を授業の最後に少し提示したり、児童の学習感想を紹介したりする。

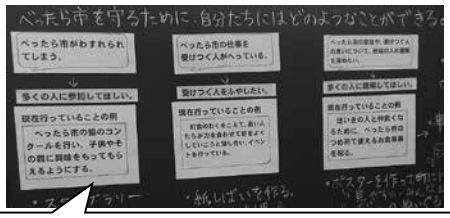
④学んだことを日常生活に生かそうとする。
・振り返りの際に、日常生活のどの場面で生かせるか、児童同士で交流する時間を設ける。

(2) 授業実践

社会科　単元名「東京都の伝統や文化、東京都の発展につくした人」
小単元名「受けつがれる祭り」

本小単元は、「県内の文化財や年中行事の様子」に関わる内容である。江戸時代の中頃から続く日本橋地域の年中行事「べったら市」を取り上げ、その歴史的背景や現在に至る経過、保存や継承のための取り組みなどを調べた。そして、保存したり受け継いだりしている人々の、工夫や努力と地域の人々の願いを関連付けて、保存や継承することの意味を考えた。

・授業の様子



発問「べったら市を守るために、自分たちには、どのようなことができるのでしょう。」

保存会会長から聞いた、現在町会の方々が行っている具体例を３つ提示した。
児童の反応「べったら市を守るために、様々な活動をしている。」「自分だったら何ができるかな。」

(3) 成果（○）と課題（△）

○代表児童が演じる祭り関係者の劇とVTRは、児童の興味・関心を高め、ゲストティーチャーの登場を劇的な演出にさせた。

△具体例を出すのは良いが、出し過ぎないこと。１つ出して、「もっと、他に解決できる案はないかな。」と言った方が良い。祭りの課題は絞らない方が良い。

５学年の実践

各家庭の米袋を掲示＆オンライン中継で学習への興味 UP ！！

(1) 目指す児童像と手立て（・）

①これまでの既習事項や自身の体験を生かして、「問い」に対する自分なりの予想をして学習に取り組む。
・田植えなどの体験を通して課題を見付けられるようにする。

②課題に関連した事象について発展的に調べようとする。
・苗を送っていただいた農家の方との交流を通して、身近に米の生産について考えられるようにする。

③地域や社会にみられる課題の解決に向けた行動につなげる。
・最新の農業の一端に触れることで、現代の農業について考えられるようにする。

(2) 授業実践

社会科　単元名「未来を支える食料生産」
小単元名「米づくりのさかんな地域」

本小単元は、自然条件を生かしながら、携わる人々の工夫や努力によって我が国の農業が行われていることをとらえる。児童が自分事として考えることができるように、自分が食べている米について調べたり、毎年交流している農家の方とオンラインで会話をしたりする。他にも、代かき、田植え、稲刈り体験を通して課題を見付け、追究する学習を展開した。児童が自身の経験と課題を結び付け、米づくりについて考えられるようにした。

・授業の様子

発問　「清原地区の方は、どのように米づくりをしているのでしょうか。」
資料　農家の方とのオンライン通信
児童の反応「昭和 20 年頃と全然違う。」「ドローンを使っている。」「人が行う作業が減っている。」

(3) 成果（○）と課題（△）

○オンラインの交流を通して、「肥料はどうしているのだろう。」「機械があれば大変じゃないのかな。」など、児童が多くの問いをもつことができた。

○グラフの提示の仕方（タブレットの活用）が有効だった。導入部分のクイズから、体験の想起、清原地区の方との交流の流れが自然であった。

△「問い」の答えになるようなものは、ブラックボックスにし、事実を断片的に出す方が良い。

６学年の実践

テープ図で表された縄文時代の長さ↓

時代の長さを視覚的に表示＆実際の出土品で歴史学習への興味UP！！

(1) 目指す児童像と手立て（・）

①これまでの既習事項や自身の体験を生かして、「問い」に対する自分なりの予想をして学習に取り組む。
・体験活動を行ったり、実物に触れたりする。

②課題に関連した事象について発展的に調べようとする。
・タブレットを活用し、児童全員の疑問を教師が把握し、「問い」を提示する。

③自分から事典やインターネットを活用して疑問点について調べる。
・学習感想の中に「疑問に思ったこと」「自分ではどう考えるか」など自分自身の生活に関連付けた感想を書く児童を学級全体に紹介し、広める。

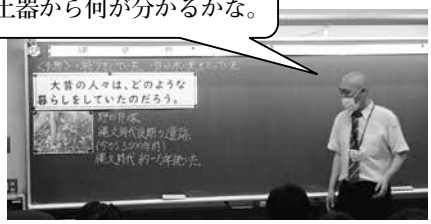
(2) 授業実践

社会科　単元名「日本の歴史」
小単元名「国づくりへのあゆみ」

本小単元では、大昔の日本で、むらからくにへと変化したことについて理解するとともに、縄文時代、弥生時代、古墳時代の特色、出来事や人物などについて考える。本時では、狩猟・採集をして暮らしてきた縄文人の生活を想像しやすくするために、単なる想像図だけではなく、実際に貝塚から出土した「縄文土器」「貝殻」「獣骨」「黒曜石」に触れる活動を設定した。

・授業の様子

縄文土器から何が分かるかな。



資料　縄文土器の他にも、貝殻、獣骨、黒曜石を提示
児童の反応「縄文土器！本物？」「器にしたり、調理に使っていたりしたと思う。」

(3) 成果（○）と課題（△）

○実際の出土品に触れることで、児童の歴史学習への関心が高まった。

○全員の考えを一括して投影することで、「問い」に対する友達の意見や考えを参考にして自身の解答を導き出す手助けとなっていた。

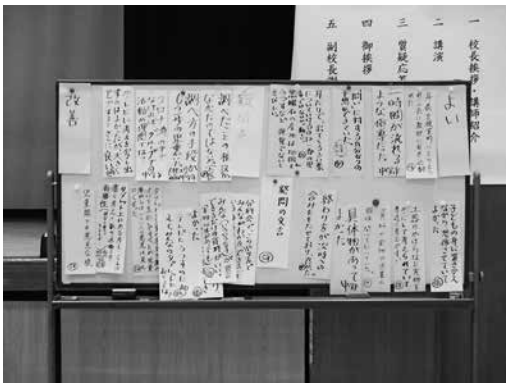
△想像図や地図などを活用して、児童の考えの根拠をしっかりさせていく必要がある。

協議会の様子

協議会の開始前に分科会毎に話し合い、１つの意見を１枚の短冊に短くまとめて書き、ボードに貼る。

・良かった点→水色短冊
・質問や疑問→クリーム色短冊
・改善点→ピンク短冊

研推が各分科会の短冊を観点ごとに整理し、話し合いのポイントを焦点化する。



教員研修（夏季休業中に実施）

みんなで地域教材開発！
～学校の周りを歩いて教材になりそうな場所、物、人を探そう～

【１年生】「掘留児童公園について」
掘留児童公園の写真と共に関係者の連絡先を一覧にまとめた。

【２年生】「お店屋さん探検」
お店屋さん探検に協力してくれたお店の連絡先などをまとめた。

【３年生】「大好き日本橋 PR 大作戦」
地域遺産認定会に協力してくれた地域の方の連絡先などをまとめた。

認定会の様子

【４年生】「受けつがれる祭り」
べったら市に関わる人々にインタビューを行い、連絡先を一覧にまとめた。

【５年生】「わたしたちのくらしと食料生産」
米の生産に関わる栃木県清原地区の方と一緒に授業を行った。連絡先などをまとめた。

【６年生】「明治の新しい国づくり」
明治維新で活躍した人物（木戸孝允、高杉晋作）に影響を与えた吉田松陰終焉の地が学区域の小伝馬町にある。他にも、地域にある、授業に活用できそうなものを写真とともにまとめた。

Ⅳ　研究の成果

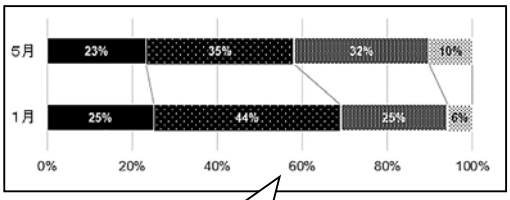
(1)「導入の工夫」とは何かについて、教員が知識を得て、児童が「なぜだろう。」と考えるようなしかけの利用を普段の授業に取り入れるようになった。

(2) 地域教材開発を行い、地域の方と一緒に授業を行うことで、児童が社会的事象を切実感をもって捉えることができた。

(3) ZOOM、発表ノート、ムーブノートなど、ICT 機器を効果的に活用することができた。

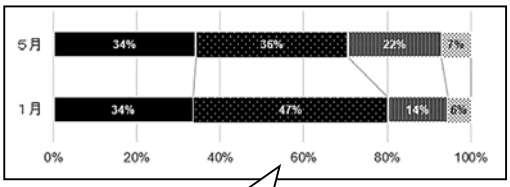
(4) 児童アンケートの結果より（一部）
令和３年５月と令和４年１月に２年生～６年生の児童にアンケートを行った。「とてもすき・たくさんある」または「すき・ある」と答えた児童の割合をまとめた。

Ｑ社会科（生活科）で学んだことが、日常の生活の中で役立ったことはありますか。



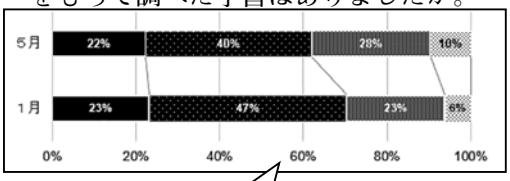
５月…58％　１月…69％　＋11％

Ｑ社会の出来事やニュースなどに関心がありますか。



５月…70％　１月…81％　＋９％

Ｑこれまで、社会科（生活科）の授業で、「どうしてだろう」「なぜだろう」と疑問をもって調べた学習はありましたか。



５月…62％　１月…70％　＋８％

これらの結果から、学んだことを日常の生活の中で役立てたり、疑問に思ったことを調べたりするなど、児童が主体的に「問い」を追究する機会が増えたと考える。

Ⅴ　研究の課題

(1) 導入時には意欲的に取り組む児童が多かったが、授業の途中には児童が主体的に学ぶのが難しかった時間があった。単元そのものへの意欲や学ぶ目的意識がもてる授業づくりを行う。

(2) 単元毎に教材との出合いのアイデアと実際に使った教材を残しておき、次年度に引き継ぐ。

(3) 歴史や政治の学習で活用できる教材（具体物）の開発を進める。

(4) 社会科と生活科の連携･接続について。生活科と社会科の教科の特質に関して比較した上で、２つの教科の関係とその連携の可能性を明らかにする。

（研究主任：山田ちひろ）